



食育だより

令和2年度 給食週間号



大津町学校給食センター 文責 橋本・甲斐



全国学校給食週間です

昭和20年、日本は戦争が終わったばかりで食料が不足していました。そのため、栄養失調の子どもたちがたくさんいました。そのころの小学6年生は、現在の小学4年生くらいの中から大きかったそうです。日本の様子を見てアメリカやアジア救済委員(ウラ)などの援助がたくさん送られてきて、昭和21年12月24日に学校給食が再開されました。

この日は学校が冬休みのため、1カ月後の1月24日から1週間で、給食に感謝する「全国学校給食週間」としています。(大津町給食センターでは18日~22日)学校給食の意義や、役割について理解と関心を深め、学校給食のより一層の充実と発展を図ることを目的としています。

給食の歴史をふりかえってみよう



明治22年 学校給食のはじまり

山形県鶴岡市の忠愛小学校で、昼食のお弁当を持ってこることができなかった児童を対象に、無料で学校給食を実施されました。その後全国各地に広まりました。

戦争がはじまり、昭和19年から中止される



昭和22年 戦後の給食開始

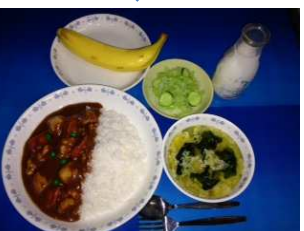
アメリカやアジア救済委員会(ウラ)、連合軍などから物資援助があり、給食が再開されました。ミルクは、脱脂粉乳に、砂糖とビタミン剤を加えたものです。温かく湯気が上がり膜がはった独特な風味だったそうです。

現在の給食



昭和25~30年頃

アメリカから小麦の援助を受け、パン・ミルク・おかずがそろった「完全給食」が実施されるようになりました。



昭和51年 米飯給食が始まる

パンや麺が中心の給食でしたが、この年から米飯の給食が始まりました。はじめは月1回でしたが、現在では週3~5回が米飯給食です。

現在は、栄養バランスはもちろんのこと、給食をとおして様々なことを知ってもらうため、行事食や郷土料理、地場産物を活用した献立を実施しています。学校での食育の教材としての役割を担っています。